【記念講演】

今こそ過去を越えグローバル人とならん！

森山新（お茶の水女子大学）

このセミナーも早いもので、8 回目を迎える。日韓セミナーが会を重ねる中で思い起こすのはかつての朝鮮通信使である。実は朝鮮通信使は江戸時代以前からあったそうだが、豊臣秀吉が当時の朝鮮を侵略し、中断した。秀吉の朝鮮侵略で両国の関係は最悪になった。

その後江戸幕府を開いた徳川家康は両国関係を改善すべく、朝鮮に使者を遣わし、朝鮮通信使は再開した。通信使は国を挙げて迎えられ、その回数は 10 数回にわたった。

明治に入り、両国関係は再び悪化、日清、日露戦争を経て、1910 年ついに日本は韓国を植民地化してしまった。そして悲しくつらい時代を経て、1945 年、韓国はついに解放の日を迎える。これを韓国では「光復節（クァンボクチョル）」と呼んでいる。

しかし、両国関係の修復には時間を要した。1965 年に日韓国交正常化が実現しても、両国関係はよくならなかった。それはなぜであろうか。いくつかの理由が考えられよう。第一にドイツのように政権が交代せず、過去に対する正当な謝罪と清算が行われなかった点を挙げることができる。第二に「徳川家康」のように関係改善のために努力する人物が現れなかったことも原因であろう。であるとすれば、私たち若者が両国の関係を変える先頭に立ち、両国の関係を変えるべきであろう。

では具体的にどうしたらいいか。まず私たちの心がグローバル化することである。確かにグローバル化には正の部分と負の部分とがある。しかし「心のグローバル化」は正、つまり絶対に必要なことである。

今までの国際関係は国益優先が大前提であった。しかしそれでは限界があると気づき始めた世界各国は徐々にグローバルな視野に立ち始めて問題解決に取り組み始めた。最近の地球温暖化や東日本大震災復興への取り組みなどがそれである。しかし依然、その背後には「自国の利益」が見え隠れしている。言うならば、まだ心のグローバル化ができていないということである。でも若者なら、自国の利益を越え、それができると信じている。

心のグローバル化を果たすためには、第一に、相手の立場に立って物事を見つめること、第二に一段上の視点に立って物事を見つめることが重要である。日韓関係を兄弟関係にたとえてみたい。歴史的に考えれば韓国が兄で日本が弟であろう。これまで韓国は兄貴のメンツを立てたがるお兄さんであり、日本は兄貴を兄貴とも思わない生意気な弟であった。これで兄弟関係が仲良くなるはずはない。

この兄弟の対立を越えるにはどうしたらよいか。それぞれが相手の立場に立つことが重要であろう。またそれを可能にするためには、親の立場に立つことが重要である。親から見ればどちらも愛する息子であり、対立が起きたのにはどちらにも非があることが見える。

かつて同徳女子大の総長が本学を訪れた際に、「韓国は寛大さ、日本は謙虚さを」と語られたことがある。心のグローバル化はまさにこれを意味する。

最近「文化相対主義」という言葉が叫ばれる。自文化中心主義に対する言葉で、多文化共生には必要な考え方とされている。しかし人間はそれぞれある文化の中で育ち、そのプロセスの中で、自然と自文化に愛着を持つようになった。これは自然な適応である。しかし、その一方で、異文化には愛着を持ちにくくなってしまう。また異文化を自文化の尺度で計ってしまうことにもなる。その結果、何で兄貴はこうなんだ、または何で弟はこうなんだ、ということになる。相手の立場に立ち、親の立場に立つことが必要になる。

これを可能にするためには何が必要であろうか。愛情であろう。兄弟や親の愛がこれを可能にしてくれる。「文化相対主義」も頭で「全ての文化にはそれぞれ価値がある」と考えるだけでは限界がある。ややもすれば無関心で終わることもあるからである。

ではどうしたら愛がめばえるであろうか。人は愛し合うと、全てがよく見え、欠点が見えなくなる。だから異文化に接する場合にも、相手の理解できない部分はひとまず置いて、まずは、相手が持っていて、自分にはない、すばらしい面を探そう。そしてそれを尊敬し、学ぼう。そこに愛着が生まれ、尊敬が生まれる。互いに相手のよいところを探してみよう。日韓はお互い、自分にはないよいところをたくさん持っている。

「心のグローバル化」により、我々が過去を克服できたとすれば、今まで対立に費やしてきた思いと力を日韓、東アジア、そして世界の共生のために用いよう。そうすれば両国の悲しい過去を越えるだけでなく、共生のグローバル社会を築く第一歩となるであろう。

東アジアでは未だ東アジア共同体、または東アジア連合の影すら見られないが、ヨーロッパは既に国を越え欧州共同体を経て、欧州連合（EU）を構築、共生の道を歩み出している。その背景には2度にわたる世界大戦の悲しい経験がある。そこで叫ばれているのが「複言語・複文化主義」である。これはこれまでの国単位の発想を地域単位へと一段階高めようという試みである点で評価できる。また、この考えはこれまで国や民族に帰着されがちであった言語や文化を個へと帰そうとするものである。グローバル時代の我々はもはや言語や文化といったものを、国を単位に見るべきではなく、個の中に内在し、それらが統合されて個の言語と文化を形成していると考えるべきである。例えば私自身の中には、日本で育んだ言語と文化だけでなく、韓国で生活する中で身につけた言語と文化とが息づいている。個に息づいた言語と文化が多様であればあるほど、それは他の個とつながる可能性となり、共生力となる。こうなればこれまで国力が背景となり、対等になりにくかった個々の言語・文化はより対等なものとして各個人の中に息づくことになる。また単言語・単文化から複言語・複文化への転換は独善性、排他性からの脱却にもつながる。この複言語・複文化主義は東アジアの共生にも様々な示唆を示してくれる。

今回のセミナーはこれまでの国の視点を越え、グローバル人とならんとするものである。このセミナーが、国連決議より、日韓首脳会談より、六か国協議よりも歴史的な一歩となることを信じたい。